

# あゆみ

---

---

65号

---

---

日本コトバの会  
2009年3月

# あゆみ65

2009年3月 ● もくじ

## もくじ

忘れられない話……………	大越ハツエ	04
寂しさの終てなむ国ぞ……………	青木健二	06
結婚50年を振りかえって……………	川島喜代子	07
四人目の孫……………	大倉庸子	10
二〇〇九年の読書会……………	西沢文子	12
幻のベルギー……………	佐藤桂子	17
あっぱれな最期……………	江田玲子	20
『書店風雲録』読後感想に代えて……………	倉谷淳子	24
宇宙船は落ちない……………	竹村外喜典	27
「坊ちゃん」を見ている「うらなり」……………	橘田滋子	30
病院……………	鈴木富男	35
安住の地へたどりつくまで(1)……………	久保秀次	39
猫のいる風景……………	塩田全美	42
街路樹の根元とはこべ……………	田中積	47
花粉症歴三十三年……………	細井郁秀	48
《講演》音声認識ソフトで文章を書く……………	渡辺知明	50

《講演》

音声認識ソフトで文章を書く

渡辺 知明

1 はじめに

はじめまして。渡辺知明と申します。今回、わたしが呼ばれたのは、音声認識技術研究の学会に、変わった意見がほしいということでございます。また、一般の方がたにも音声認識ソフトに関心を持っていただくつもりでお話をいたします。

まずはじめに、音声認識ソフトをお持ちで使っている方、手をあげていただけますか。(数人が手を上げる)。少ないですね。はい、ありがとうございます。まず。それでは、持っているけれど使っていない、休ませているという方、手をあげてください。少し増えましたね。それでは、まったくお持ちでない方、手をあげてください。はい、ありがとうございます。ほとんどの方が使ったことがないようですね。ありがとうございます。

お持ちでない方には、使ってみようと思われるよ

うに、お持ちの方にも、あらためてもう一度、使おうかと思われるようになっていただければ幸いです。まず最初に、わたしの関係する二つの会についてお話しします。

一つは、日本コトバの会です。一九五二年、昭和二十七年に設立されました。ちょうど、わたしの生まれた年です。長い間、代表者は大久保忠利でした。国語学・文法学の研究者です。一九九〇年に亡くなっています。S・I・ハヤカワ『思考と行動における言語』(岩波書店)の翻訳で、言語学者として名前が知られています。なお、国語教育についても活躍した人です。その人が指導していた会です。

もう一つは、コトバ表現研究所です。一九九三年にわたしが設立しました。音声言語の表現と文章表現の研究をしています。文章表現の指導が先行しまして、のちに音声言語の重要性に気づいて、近ごろは音声言語の面から研究をしています。近ごろは一般の方がたの文章添削の指導をしています。添削の技術は一般に理論化されていません。それで添削というのはどういうものなのだろうかと考えて研究をしております。

## 2 考えることと書くこと

最初に、なぜ音声認識ソフトに目をつけたかお話しします。この図をご覧ください。人と人との言語によるコミュニケーションを図にしたものです。わたしの師である大久保忠利が考案しました。心理学者の波多野完治さんが「大久保モデル」と名づけています。この一部のはたらきを音声認識ソフトにまかせられるのです。「言作品・話・文章」の部分です。（「コトバの網の図」参照）

右側がコトバを発する人、発話者です。いわば思考の表現者です。左側がコトバを受け止める人です。発話者は、見たもの・考えたことを「考え」にします。言語化するわけです。表現者のアタマにはコトバの音（オン）と意味とが浮かびます。「内言」です。それに対して、外に出たコトバは一般に「外言」と呼ばれます。しかし、大久保は「外内言」と呼んでいます。外言化されたコトバが内言と協力し合いながら外に発せられているからです。

「言作品」を外に出す手段は二つあります。一つは音声によることです。声で発する「話」です。「発話」とも言われます。それともう一つ、文字に

よることば、つまり「文章」です。「文章」は「話」よりもずっと着実な思考を可能にします。

しかし、文章は手で書きます。パソコンで書くにしても手の作業があります。それがモノ・コトを考えるためにはジャマなのです。書くことは、できあがっている考えを文字にするわけではありません。書きながら考えているのです。アタマを使っているわけです。アタマの中で声のことばを操作しているのです。いわば、アタマの中のコトバの操作と手作業による文字のことばと二重の操作をしているのです。

わたしは以前から書くときの手の作業をどうにかして省くことができなかつたと考えていました。できれば、口から声を発するだけでものを考えられないだろうか。しかし、何の運動もともなわない思考というものはあり得ません。声を出すということは一つの運動なのです。労働です。これと思考との結びつきがあります。そのためには、この手の運動を省略したいということ長い間考えていました。

そして、あるとき、音声認識ソフトがあることを知りました。わざわざ手で書かなくとも、声を出すだけで文章になるのだということです。コトバから直接に文章化できるということです。それはいいものが

あると思いました。そこで、音声認識ソフトに飛びついたわけです。それは六、七年前のことでした。最初に買ったのは、Voiceでした。つづいて、ドラゴンスピーチも買いました。

それからしばらく二つのソフトを使ってみましたが、認識能力も低く、使い勝手もよいものではありませんでした。それで間もなくソフトを眠らせていました。それから二年ほどして、どちらのソフトもバージョンアップされたので買いました。そのとき、どちらの製品についても、これは使えるぞと思いました。それが四、五年前のことです。

そして現在では、三つのソフトを使っています。三つ目は最近出たばかりのAmiVoiceです。三つのなかで最も使いなれているのがドラゴンスピーチです。三ヶ月ぐらいの訓練で十分に実用になります。今はほとんど訂正なしで気持ちよく入力できます。

### 3 音声認識ソフト使用の動機

現代社会では、文字のことばが偏重されています。文字優先のコミュニケーションです。しかし、わたしは音声のことばに関心がありました。文学作品の

声による表現的な読み方の研究をしています。音声のことばを体を使って声に表現することです。そのままのかたちで文章化できないかと考えました。それで、音声認識ソフトを使って文字のことばと声のことばとの統一ということを考えたわけです。その内容はいくつかあります。

第一は、声のことばと文字のことばとの一体化です。現在は、話しコトバと書きコトバとが分離している状態です。話しと文章とは別のものと考えられています。わたしは話しコトバを文章に高めたたいのです。それは完全な文章語でもないし、話しコトバでもないものです。話しコトバと文章語との中間のようなことばです。話しコトバとしても自然に感じられる文章語ができないか、その訓練に音声認識ソフトが使えないだろうかということでした。

第二は、手作業の省略化です。手で書いていると、「手が疲れてきたなあ」とか、「この鉛筆は書きにくいなあ」とか、「この万年筆はインクの出が悪いなあ」とか、そんなことが気になるものです。手も疲れます。わたしの場合には、声を出す方が手で書くよりも楽だったのです。しかも能率的です。一般的に音声認識ソフトでは、手入力の三倍から五倍の

速さで入力できると言われています。たしかにそのとおりです。すらすら読んでいく速さで入力できます。

第三は、声に出すことで「読み・書き」の能力が向上するのではないかということです。つまり、文章を書くような正確な意識で話すことによつて、話す力そのもの、あるいは文章の構成力がつくようになるのではないかと思えます。いわば、自分自身を、その実験台にしてみようというわけです。

#### 4 音声認識ソフトの使い方

音声認識ソフトについて、「口述筆記」とか、「口頭記述」とか、いろいろな言い方を考えているのですが、なかなかいいものがありません。「筆記」というのがイメージにあわないので困っています。わたしの使い方は五つあります。

一つ目は、文書の資料を引用するときに読み上げて入力します。これは一石二鳥なのです。つまり、資料は一度は読まねばならないものです。声に出して読むことは理解を高めますから、文章を理解しながら同時に引用のための入力もできてしまうわけ

です。

二つ目は、下書きからの清書です。あらかじめ下書きを書いておきます。これは手で書きます。下書き原稿を読み上げながら内容を確認して、文章を構成しながら書けるわけです。そして、清書もできます。単なる清書ではありません。推敲を兼ねた清書です。読み上げながら原稿が書けるのです。このパターンがいちばん多いものです。

三つ目は、メモからの口述筆記です。これはあらかじめ単語メモを用意してレジユメの状態からの文章化です。単語を並べておいて、その場で文に組み立てながら、文をつないで文章化していくわけです。

四つ目は、講演録音の口頭記述です。いわゆる「テープ起こし」です。ふつうは録音を聞きながらパソコンで入力しますが、音声認識ソフトでは、キーボードで入力するのではなく、声で繰り返して入力するのです。おもしろいことに、自分が話した内容ですから、口で繰り返していると、付け足したいところがふつと浮かびます。手で書くときよりも声の方が発想が浮かびやすいのです。手で書くよりもアタマもこころも動きやすいのです。手で書いている時にはどうしてもテンションが下がります。つまり、

声を発しながら録音を起こすことが文章の推敲になるわけです。使いなれたフレーズならば、ほとんど百パーセント認識してくれます。ですから、安心して書き起こしができます。ペラペラと読みあげて、本当に手入力力の五倍くらいで文字化できます。

五つ目は、手ぶらでの口述筆記です。暇があつて、何もすることがない。そんなときに、音声認識ソフトを取り出します。「今日は何も仕事がないから、ちよつと口で音声認識ソフトのテストをしてみよう」と話しはじめるのです。そのうちに、思いもしないことをしゃべり出します。「徒然草」の心境です。字面がよく見えるので、それに反応して次つぎにアイデアが浮かぶのです。

ですから、十五分ぐらいずらずらとしゃべっているうちに、その日の日記が書いてしまうのです。そういう、非常にありがたいソフトです。

## 5 音声認識ソフトの効用

それでは、音声認識ソフトの効用です。これまで、わたしが実感していることが、いくつかあります。

第一は、能率的な文章の文字化です。これは、入

力が速いとか、楽だとか、ということはずぐにわかることです。

第二は、文章作成能力の向上です。音声認識ソフトは単語を入力するものではありません。単語をいくら並べても、反応してくれません。判断してくれません。一文のかたちで話したほうが、認識の正確さが高まります。ですから、話し手は文として構成された話し方をしなくてはなりません。

文の終わりごとに、いちいち「マル」とか、「テン」とか言うのです。わたしはその言い方がもうクセになっていきます。文を意識して話すことが文章能力を高めるのです。つまり、文意識が変わるのです。文のかたちで話せるようになります。どの音声認識ソフトにも、句読点を自動認識させる機能はついていますが、あえてテンやマルを口で言うことに意味があるのです。文の構造が意識できるようになるのです。

第三は、発音や発声の基礎訓練になります。わたしは発音と発声の基礎訓練の指導もしています。ここに音声認識ソフトを使っている方が来たことがあります。「発音が悪いようなので訓練をしてください」ということでした。少し練習をして帰っていき

ましたけれども、あとから届いたメールで「少し認識能力が上がりました」とありました。

音声認識ソフトではある程度の発音の正確さが求められます。逆に言うと、それが発音の基礎訓練となる音声認識ソフトの効用です。自分の発音についての意識が高まります。利用者の仕事を楽にするだけでなく、利用者自身が成長して行けるソフトです。

第四に、言語表現能力の向上です。じつは、わたしがみなさんの前で試されているわけです。「なんだ、あの先生は言語能力が向上したというけれど、あの程度なのか。あれでスピーチ能力が向上したのか」と言われそうな不安があります。話し方の先生と言うものは常に話し方が問われているのです。それが怖いのです。話し方教室などというものをやりますとそれが試されるのです。自分の話し方そのものが問われるわけです。でも、総体的には、わたしもスピーチ能力は上がったなと思っっているわけです。

そしていちばん大事なのは、言語的思考力の向上です。「ほら、あれがあれするから何があれしてあなあった」という言い方はまずいのです。何ごとも正確に言語化して語らなければなりません。これ

は音声化に始まります。音声で書いたと言っても、それが文として文字に定着されるわけです。ですから、常に書かれた文章の質が問われるのです。

コトバの能力では、「読み・書き、話し・聞き」の四要素のすべてが問題になります。話しや文章では「聞き」は関係ないじゃないかと思われるかもしれませんが、話しをしているときには、自分の話をしっかり聞いていなければならぬのです。声で文章を書くことは辛いことです。なぜなら、自分の話したことを一時記憶してないと、言うべきことが文にまとまらなくなるからです。文章では、書いている途中のものが残っています。しかし、話の場合には、残りませんからそこに戻ることができないのです。「あれ、三秒前に何を話したかな」と考えてみても忘れていきます。それで話しがつながらないことになります。

## 6 音声認識ソフトの問題点

便利な音声認識ソフトでもいくつかの使いにくさがあります。わたしは、新しいソフトが出るとすぐ買って試します。使用時間の半分くらいは、メン



テナンスです。それが面倒なところです。それがちょっと大変なのです。

でもひっくり返して考えたらどうでしょうか。これは「たまごっち」のようなソフトなんです。育つんです。うまく育つこともあるし、突然、変な癖がついてしまうこともあります。変なことを覚えてしまうんです。

あるとき、「このようになる」というフレーズの「なる」が「成田山」の「成」に変換されるようになりました。ドラゴンスピーチの場合です。何回、直しても治りません。それで、思い切つてスピーチファイルを新しく取り替えたのです。もう半年も使い込んだファイルなのですが、新しいものを作ろうと決意しました。それがかえつて良かったのです。その後、うまく育ちました。

つまり、これもソフトの問題ですが、使い始める前に、トレーニングあるいはエンロールといいますが、何かの文章を読み上げないといけないのです。これによつてユーザーの声の特徴を学習するわけです。これをなくしたのは一番新しいソフトのAmiVoice<sup>®</sup>です。しかし、実際には必要なのです。それで使い始めのときには、しばらく変換にもたつきがありま

す。

ユーザーにとっては、最初のトレーニングやエンロールがどのような性格なのか見当がつかないので、どんなテンポで、どんな区切り方で、どんな発音で読んだらいいか。読みまちがいはどうするかなど、見当がつきません。マニュアルではそのあたりが詳しくないのです。どういう読み方をするか、本来の学習になるのか、初期にうまく行くのか、それがわからないのです。つまり、ソフトの学習機能の全体像がわからないのです。

ユーザーもまったく新しい体験をするわけですから、早く全体像を知りたいわけです。ところが、それがわからないのです。どうやって読んだらいいのか、わからない。

それで、ついつい「わ、た、し、は……」など一音ずつ区切ってしまうのです。コトバは単音のつながりであるから、細かく区切れば分かるだろうと思ふのです。「わ」と言ったり、「わたしは」と言っても出ない。「わたしは」と繰り返しても出ない。それで、「なんだこれは……」といった感想を持ってしまう。それで、ついに使わずにしまいこんでしまうことになります。

たしかに、あとでマニュアルをよく読めば「そのような読み方はいけないのです」と書いてあります。そのあたりも、音声認識ソフトに入門しにくいところです。

## 7 音声認識ソフトへの対策

音声認識ソフトを改良するためのいくつかの対策があります。

一つ目は、最初のトレーニングを楽しくするため工夫です。これは *Voice* の例です。トレーニングが五つあります。一本が二十分くらいです。その中に、わたしの好きな新美南吉の「手袋を買いに」という作品もあります。童話です。「寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。」という書き出しです。

これは楽しく読みました。トレーニングが辛いものではなくて、読んで楽しみたいというものになればいいのです。この動機と結びついたら、どうにかなるのではないのでしょうか。

人に命令指示するのも音声認識ソフトの一つの働きです。カーナビゲーションで「右へ、左へ」と命

令することは、あまり楽しいことではないでしょう。それに対して、童話みたいなものを読む方には楽しさがあります。読んでる時間が楽しくていつの間にか、トレーニングやエンロールが終わってしまおうということになればいいのです。そんなアイデアはないのでしょうか。そう思いました。

わたしは日ごろ文学作品を表現的に読んでいますから、調子をつけて読んでみることも試してみました。たとえば、アクセントやイントネーションやプロミネンスなどを強めにつけるのです。「元文三年十一月二十三日の事である。大阪で、船乗業桂屋太郎兵衛と云ふものを、木津川口で三日間さらした上、斬罪に処すると」などと、やってみましたが、結構、力んでも大丈夫なのです。

そのような点についてもマニュアルに解説が欲しいのです。共通語のアクセントでなくてもだいじょうぶです。関西アクセントでも平気です。アクセントが平板であっても、文脈によって判断をしますから、アクセントによる認識のちがいはありません。そのあたりも、わたしは早く知れたかった問題です。

二つ目は、入力 of 修正と学習機能の問題です。たいていの人が途中でいやになってしまうのは、変換

の修正がいっぱい出てくることです。いちいち直しておかないと、あとで同じまちがいをすることになります。わたしはメンテナンスだと思って楽しんでやっています。パソコン一台で秘書をひとり雇ったようなつもりで面倒を見てやればいいのです。指導して行くのです。そうすると認識の度合いが格段に上がるのです。はじめのころ、ViaVoiceとドラゴンスピーチを使っていたときには、ドラゴンスピーチの方が修正しやすかったのです。それで、ドラゴンスピーチを使うようになったのです。

じつは、この講演を引き受けしてからすぐに、ATOK2008 が出ました。ATOK には音声入力エンジンのついていて、ViaVoice と組み合わせてATOK の辞書を使って変換ができるのです。漢字変換を確定しないうちにエスケープキーで選択状態にして、もう一度スペースキーを押して変換をかけると、ATOK2008 の辞書を利用することができるようになります。それで、ViaVoice と組み合わせを試してみました。すると、以前には ATOK 16 と組み合わせて使っていたのですが、はるかに認識能力と変換効率がよくなっています。

そんなわけで、ViaVoice と ATOK2008 の組み合わせ

せについても改めて評価しなされているところです。ただし、ViaVoice 単独の場合には、それほど効率はいくはありません。ひとりでは仕事できません。ただし、日本語入力の漢字変換の学習と同じです。ユーザーが学習の確定をしなければいけません。それでどうしたら能率的な確定ができるかという問題になります。

三つ目の提案はそれです。ユーザー独自の辞書を作るツールです。一括した辞書登録をすると認識能力があがります。入力をしながら個別に辞書登録するのは能率的ではありません。別の辞書ファイルを作って一括で登録するやり方が簡単にできるとありがたいのです。そんなツールがあったソフトもありますが使いにくいのです。楽に使えるかたちでユーザー辞書の作成ができるというのがいいのです。

四つ目です。キーボード操作との関連です。AntiVioの。では、音声入力中にキーボードを受け付けられない設定になっています。キーボードが使えないと困ります。ところが、ドラゴンスピーチは、自由にキーボードの操作ができます。文節の区切りもできたようになります。

音声認識ソフトの開発者は、まったく手を使わず

に入力できることを目指しているのでしょうか。わたしはキーボードの操作を視野に入れたソフトで構わないと考えています。今まで使いなれたキーボード操作をしながら、手間のかかる文章の入力のところは音声で入れるという分担してもよいのではないのでしょうか。かえってそのほうが能率的です。忙しいときにはつい手が出るものです。「口で言うより手のほうが早い」はことわざばかりではありません。

## 8 普及のためのアイディア

ここで、ソフトの開発者に対して、わたしのアイディアと要望をお話しします。

一つ目は、ソフトの機能の単純化です。オプションによる機能の分割化です。二つの機能を考えています。一つは、ICレコーダーとの連動です。ICレコーダーに録音したものを直接に文章化する機能です。これは特別なユーザー以外は必要ないでしょう。もう一つが、音声によるコマンド操作です。わたしは使っていません。手の方が早いのです。「わたしはのんびりと声のコマンドでパソコンを操作し

たい」という人もいるでしょう。この二つについては、ソフトの機能を分化してしまうとよいでしょう。

音声認識ソフトの基本機能は、文字入力に限ればいいのです。文書を書くために限定したソフトでいいのです。単純化です。そのかわり、音声認識と変換を充実させます。そして、「キーボードも使ってください」と言ってしまうのです。「さあ、これどうだ。ICレコーダーを使いたい人は、オプションのソフトを使ってください」という考えです。

二つ目が、マニュアルの工夫です。最初に述べましたけれども、まったくの初心者を使うときに、親切なマニュアルであるかどうかが問われます。今、わたしの手元に三つのソフトのマニュアルがあります。これはAmiVoiceのマニュアルです。A5版45ページのパンフレットです。あまりに簡単すぎてかえってわかりにくくなっています。これはVatVoiceのもので、B5版80ページです。適度な厚さであります。しかし、さらにATOKとの組み合わせかたなど書いてあるとものと親切です。これがドラゴンスピーチです。B5版20ページで、手ごろな厚さです。ただ、読みにくいのは一般のマニュアルと同じです。どちらのソフトも翻訳のマニュアルなのでなさら

分かりにくいのでしょうか。

そこで出てくるのはソフトの普及本です。『音声入力はおもしろい』とか、『音声入力で遊ぼう』、『話す力を育てる音声入力』とか、いろいろな内容が考えられます。そういう本があつたらわたしも欲しくなります。読みたいと思います。そういう本をだれか書いてくれないでしょうか。

三つ目は、学校教育への応用です。まず、板書の代わりが考えられます。先生が授業をするとき、「はい、みなさん、今日は教科書の三十一ページを開いてください」——これが文字でホワイトボードなどに表示されます。「今日は『ごんぎつね』の話」を先生といっしょに読みましょう」という具合です。先生は板書をしません。生徒は先生の話すことばを文字でも見ることができます。先生も生徒たちをよく見ることができます。生徒は表示された文字を写せばいいのです。

実際、こんな授業の可能性について、わたしのところへ問い合わせがありました。実演をしてみせましたら、「これなら使えますね」と言って帰って行きました。つまり、声で語られる話が文章でもあること、漢字仮名交じり文なのだという理解です。

さらに、作文教育にも応用できます。実際に生徒に音声認識ソフトを使って文章を書かせてみればいいのです。いろいろな学習の可能性があります。発声や発音から、文の組み立て、文のつながりなどの教育にも発展することでしょう。

四つ目です。これが最後ですが、いちばん重要な提案です。音声認識ソフトを実践する塾です。こんな呼びかけになるでしょう。「あなたは、発音・発声に自信がありますか。いつでもスピーチをする自信はありますか、このソフトを使ってここで三分しゃべってください。その話があなたの文章につながります。その話によって文章を書くことができるのです。パソコンの画面に文字が表示されますから、その内容を確認しながら読んでみてください。」

じつは、こんな実践活動を日本コトバの会では開始しています。現在、研究会を開いています。毎月第四土曜日の午後です。ひとりずつパソコンの前に座って話してもらっています。「とにかくしゃべってください」と言うと、「しゃべったことないからできないよ」と詰まり詰まり話しています。最初の課題は、文の組み立てでしゃべるといことです。パソコンや音声認識ソフトの操作の仕方についても、

お互いに教えあっています。

要するに、音声認識ソフトの普及のための総合的な学習機関をつくるということです。それは、話すことの苦手な人でも話せるように育てる文化運動のようなものです。そのような組織を背景にすることによって、音声認識ソフトを普及させることができるとでしょう。

以上で、わたしの話しを終わります。ご静聴ありがとうございました。最後に少し時間がありますので、ご質問をお受けします。

**質問**——「効用」というのが、かえって音声認識ソフトの問題なのではないかというふうに思いました。使う側から言うと、発声や発音がいいかげんでも、ちゃんと認識してほしいという希望がありますが、いかがでしょうか。

**回答**——わたしは音声認識ソフトを売る側ではありません。日本コトバの会もコトバ表現研究所も、日本人の言語能力を育てるという目的を持っています。常に教育と育成を考えています。自己変革が楽しい——楽しみながら読んだり書いたりして力がつくし、言語能力が高まるといふねらいがあります。発音の

悪いものまで聞き取れというのは技術的にむずかしいでしょうね。どっちもどっちもなのです。秘書をなだめながら付き合う面も必要だと思います。

**質問**——先生は音声認識ソフトを使って何時間くらい疲れずに入力することができるのでしょうか？

**回答**——いろいろな発声法による入力の仕方があります。たとえば、アナウンサーのような話し方をすれば、無理をせずにいぶん長い間、話し続けることができます。しかし、それではおもしろくありません。わたしが期待するのは、音声認識ソフトを使って楽しみながら文章をつくるということです。声の表現に自分の思いを込めたり、話しをしながら思考を発展させるやり方です。読んでいる内容が楽しければなおさら楽しいでしょう。音声認識ソフトを単なる仕事の道具として使った場合には辛いかもありませんが、そこから楽しみを生み出すような使い方というものが必ずあると思います。

**質問**——先生のようなモチベーションを持つためには、どのようにしたらよろしいのでしょうか？

**回答**——自分の思いをコトバにしたいとか、何か文章を書きたいなあという気持ちが大前提でしょう。学校教育でも、ことばの表現をすすめる必要があります

ます。「思ったことを話してごらん」とか、「今日は君は何を言いたいの」と問いかけて、話をさせてみると、「どう、こういう文章になるでしょう」、「ことばはこんな形で文字になって残るんですよ」というような形で、基本的な表現に対するモチベーションを育てることでしょう。ですから、ことばについて、話したり、書いたりすることに興味を持つ人ならば、楽しくなると思います。日記を書くことでも、ぼんやりしながら、ポケットに手を突っ込んででも書くことができるというのは楽しいことではないでしょうか。長い文章も書くのが楽になります。わたしの周辺の方がたは主婦ですけれども、ちよつと文章を書き始めた人ならば、考えることに集中するために、手の労力を少なくしたいということになるでしょう。

みなさんも、一度は仕舞い込んでしまった音声認識ソフトを取り出してみませんか。また、これまで使っていない方も、これを機会に試してみませんか。

どうも、ありがとうございます。

(2008/10/23。電子情報技術産業協会 (JEITA) 主催  
Speech Technology Today and Tomorrow 招待講演)

※文集『あゆみ』は日本コトバの会  
文章教室の学習用のテキストとして  
作られています。ほぼ原稿どおりで  
すが、明らかな誤植や改行の誤りに  
ついては訂正してあります。これま  
でさまざまな形で発行されました。  
前号までのB5版から今回はA5版  
にしました。費用も手間もずいぶん  
省けるようになりました。これでよ  
り頻繁に文集の発行が可能です。こ  
の形式で文集発行希望の支部の方は  
お知らせください。

(渡辺)

## あゆみ 65号

2009年3月25日 第1刷

頒価 500円

編者 渡辺 知明  
発行 日本コトバの会  
発行所 品川区東五反田2-15-6-515  
〒141-0022 電話&FAX. 03-3445-6499  
振替 00180-6-175989